

第1回京丹後市教育振興計画策定委員会会議録

日時：令和6年3月12日（火）13時30分～15時30分

場所：京丹後市役所峰山庁舎 2階 201・202会議室

出席者 和田委員長、赤松副委員長、竺沙顧問、中川顧問、林顧問、櫛田委員、
板倉委員、奥田委員、中村委員、木野瀬委員、味田委員、小谷委員、
藤田委員、梅上委員、石田委員、今度委員

欠席者 蒲田委員、藤井委員、中山委員、岡田委員

オブザーバー 京都府丹後教育局 田中指導主事

事務局 松本教育長、引野教育次長、久保理事兼総括指導主事、
川村理事兼学校教育課長、蒲田子ども未来課長、小森生涯学習課係長、
下戸スポーツ推進室長、村田文化財保存活用課長
西村教育総務課長、吉岡教育総務課長補佐、松下教育総務課主任

議 事

1. 委嘱状交付式
2. 開会
3. あいさつ 松本教育長
4. 自己紹介 資料1
5. 策定委員会委員長及び副委員長の選出
委員長・副委員長 あいさつ
6. 京丹後市教育振興計画の概要説明並びに主な取組み状況について 資料2
7. 教育振興に関するアンケート調査結果について 資料3
8. 策定にあたっての考え方について 資料4
(意見交換)
9. 京丹後市教育振興計画策定スケジュールについて 資料5
10. その他
11. 閉会あいさつ 引野教育次長

【議事】

1. 委嘱状交付式
～机上配付～
2. 開会
3. あいさつ
〈教育長〉

皆さんもご存じのように、今日、京丹後市教育委員会としましては、本年度、今後の京丹後市の教育の在り方について検討いただくために、京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方検討会を1年間かけて、検討を進めて参りまして、この1月に最終まとめを出させ

ていただいたところです。

今後の教育委員会の学校、子どもたちの教育の在り方をどうしていくべきかというところで、多くの著名な有識者の方々にもご参画いただき、そのまとめをさせていただいたところですので、基本的にはこの策定委員会につきましても、そうした在り方検討会の最終まとめもベースにしながらご検討いただくことになろうかと思っておりますので、この後ご説明もさせていただきますので、そうしたものも踏まえ、ご検討いただけたらと思います。

ただ、今回策定します市の教育振興計画につきましては、令和7年度から令和16年度までの10年間を見通した計画となります。ですから10年間を見通した上で、10年後の子どもたち、例えば入学した子どもたちが高校に上がる姿、さらには小学6年生が卒業して今年中学校行きますが、そうした子どもたちが社会人となったときの姿というようなところを思い描いていただき、そうした10年後の子どもたちにどんな資質能力をつけていくべきなのか、さらには社会教育の中で、どんな活動でそれを補完していくべきなのか、スポーツによってどんな部分を補完していくべきなのかというような視点に立っていただき、ご意見を積極的に述べていただけたらありがたいなと思っているところです。

ですから、私たちとしても、国の教育振興基本計画や府の計画等々も出させてはいただきますが、そうしたものをなぞるような総花的な計画ではなく、少し特色のある、エッジの効いたといいますか、コンパクトに焦点化した京丹後ならではの視点を取り入れた計画にしていきたいと思っていますので、あわせてそのあたりもお含みいただき、ご検討いただければありがたいと思います。

後になりましたが、笠沙様と中川様と林様には顧問という形でお世話になりたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。本来ですと顧問というのは、この要綱上は委員長が依頼することになっていますが、1回目ということで私のほうで依頼させていただいて、1回目の出席をしていただいているということでお許しいただけたらと思います。

先ほども言いましたように、皆さんの様々な知恵をいただきまして、子どもたちが二十歳を過ぎて社会人となって、本当に自分たちが社会の中で、こういう学びをしてこういう力をつけていってよかったなと思うような、そうした教育が進みますことを祈念しまして開会のご挨拶とさせていただきます。

本日から、どうぞよろしくお願いいたします。

4. 自己紹介 資料1

～顧問、各委員、事務局側 紹介～

5. 策定委員会委員長及び副委員長の選出

委員長に和田委員、副委員長に赤松委員選出

＜教育総務課長＞

それでは、今後の進行につきましては、委員会設置要綱第6条により、委員長が議長となるとなっておりますので、委員長にお世話になりたいと思います。よろしくお願いいたします。

<委員長>

それではどうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日、傍聴の希望がございますので、許可をしたいと思います。よろしくお願いいたします。

～傍聴人 入室～

<委員長>

それでは傍聴の方においでいただきましたので、次第によりまして、議事を進めて参りたいと思います。

初めに、次第の「6. 京丹後市教育振興計画の概要説明並びに主な取組み状況について」事務局からご説明をお願いします。

6. 京丹後市教育振興計画の概要説明並びに主な取組み状況について 資料2

～事務局説明～

<委員長>

怒濤のごとく膨大な資料が出てきましたので、どこをどう理解していいのか分からないというのが私の率直な感想ですが、ここで、進め方について確認をしておきます。

今、6番のところを報告、提起していただきました。次に7番、教育振興に関するアンケート調査について報告をいただきます。8番に、策定にあたっての考え方についてとありますが、とりあえず6番と7番につきましては、今のように聞いていただいて、質問、疑問、意見等について、とりあえず受け付けをしていきたいと思います。

一番大事なところは、8番に位置づけたいと思いますので全体を通して意見交換ということですので、その中でそれぞれのお立場でのご意見、あるいは一般的な感想、意見を含めていっていただくということで、初回でもありますので何とか全員の方からご意見を拝聴したいと思いますので、どういうことを言おうかなということを考えながら聞いていただければと思っています。

冒頭は、積極的にご意見をいただける方に自主的にご発言いただき、あと、なかった方については順番に全員がご発言いただくというようなことで考えていますが、よろしいでしょうか。

よろしいですね。という前提の中でただいまから進めさせていただきます。

それでは6番の1から7までの重点目標について概略をご説明いただきましたが、この中でご意見質問等ございますか。

ないようでしたら、7番の教育振興に関するアンケートの調査結果について、事務局より説明をお願いいたします。

7. 教育振興に関するアンケート調査結果について 資料3

～事務局説明～

〈委員長〉

アンケートの結果について、かいつまんで報告をしていただきました。
ご質問ご意見等、気づかれたことがあればお出しください。

〈委員〉

質問ですが、2番目の「あなたの年齢は」というところを見ると、60歳以上の方が多くそれ以下の方は各年齢層少ないです。この不均衡というのは一体どこから出たのでしょうか。

これは多分、外部に委託ですよね。市が独自にやられた調査ではないというふうに個人的には思っているのですが。

〈教育総務課長〉

年齢につきましては、16歳以上無作為抽出して2,000人に純粹にアンケートを送付させていただいています。そのうち回答があったものを機械的にまとめさせていただいて、回答のあったものの構成がこういった状況だということです。

〈委員〉

市が独自に調査をなさったということですか。

〈教育総務課長〉

外部に委託はせずに、市のほうで全て郵送、受付けをしています。

〈委員〉

この年齢関係の不均衡というのは是正されるような措置はしなかったということですか。

〈教育総務課長〉

市内に住まわれている方の年齢構成があります。それを無作為で抽出していますので、市内に年齢構成の中でお送りして、その中で回答があったのはこういった状態で、特にこの年代の方にアンケートを取ろうとか、そういったことの工夫等は今回のアンケートでは実施していません。

〈委員〉

分かりました。そうすると、この結果で言えば60歳以上の方が半分占めているわけですね。確かに60歳以上というと、退職をして回答しやすいというのはよく分かりますが、しかし、それを市民のアンケートの結果として、市民はこういうことを思っていると

即断するのは早いような気がします。何かもう少し方法があるのではないかと私は思います。

〈教育総務課長〉

例えば、保護者の年齢層の回答ですとか、クロス集計といった手法もありますので、今後、分析の中でこういったデータもということがあれば、そういうことも集計の中ではしていきたいと考えています。

〈委員〉

ありがとうございます。ぜひ必要だと思っています。これでもって京丹後市の市民というのはいうふうに思っているんだよというのは、即断には早すぎると思います。

〈委員長〉

ありがとうございました。アンケートの結果が、市民幅広に取りきれていないということかなと思いますので、またアイデアがあったら、よろしくお願ひしたいと思います。

ほかにありますか。

〈委員〉

8番以降の設問ですが、回答は1つだけですか。それとも複数ですか。内容によっては、普通ではだいたい複数回答をすると思いますが、同じような内容もあるし、これだけが重要だというようなものはちょっとおかしいという感じもしますが、いかがですか。

〈教育総務課長〉

設問の中で回答の個数がたくさんあるものにつきましては3つまでとか、少ないものについては1つまでとか、というようなことを決めながらアンケートはさせていただいています。

〈委員長〉

ほかにありますか。

〈顧問〉

先ほど委員の方もご発言されていましたが、年齢層のところで40代、30代以下が極端に少ないという点に関して私も同感で、とりわけ40代以下の方がメインで接触するメディアがスマートフォンのディスプレイなんだろうと考えると、私が聞き漏らしていたら申し訳ありませんが、アンケートの手法としてきっと紙を配られたのだと思いますが、メディアをミックスして、スマートフォンでの回答や、子どもたちがGIGA端末で答えられるようにすると回答率が上がってくるのではないかと感じました。

それから、質問の最後のほうで、図書館にアクセスしたかとか、イベントに行ったこと

があるかという回答が極端に少なかったことに関しても、やはり周知の仕方がいわゆるオールドメディアというか、掲示板とか、なかなか若い人がアクセスしづらいようなものをお使いであれば、こういった部分が改善し得るのかなと思いました。

そもそも、このアンケートを正しく理解するという意味では、どのような告知が行われたのかが何も分からないので、この資料を第三者に対し、より分かりやすくということであれば、もう少し補足を、どういう機会があったのか、例えば地域住民が何分ぐらいかけて行くような場所に図書館があるのか、京丹後に住んでいない人間からすると分からないので、これが適切な回答結果なのか否かというのも何とも掴みづらいというのが、このご説明を聞いての感想と意見になります。

〈教育総務課長〉

まず1つ目、このアンケートの回答周知についてです。

アンケートの実施の方法は、住民基本台帳から無作為に16歳以上の方2,000人を抽出して、郵送でアンケート用紙を送付させていただきました。その中には、QRコードを入れまして、ホームページにつながり、そこでアンケートを入力できるような仕組みもつくらせていただいていますし、返信用封筒を入れてそれを返信いただくというような方法も採っていただけるということで、できるだけお答えいただきやすいように工夫はしたつもりではあります。

年齢層のところにつきましては無作為で聞いていますので、先ほど言われていますクロス集計などの手法で、少し年齢層ごとの集計もしながら、今後の計画づくりの中での参考としていきたいと考えています。

あと図書館の関係については、市内在住の方に送っていますので、市外の方に聞いているということではありませんので、図書館の距離等は一定把握もされながら回答いただけていると考えているところです。

〈委員長〉

ありがとうございました。

ほかに、ご意見、ご質問はございますか。

ないようですので、続きまして「8. 策定にあたっての考え方について」事務局より説明をお願いいたします。

8. 策定にあたっての考え方について 資料4

～事務局説明～

〈委員長〉

ありがとうございました。今後のスケジュール等についても含め説明をしていただきました。

それでは、ただいまの8番のところも含めまして全体の意見交換に入っていきたいと思

います。学校教育、社会教育、スポーツ振興、文化財の保存活用等々、それぞれの立場のことでも結構ですし、全般のことでも結構ですので、感想、意見、あるいは今後の振興計画の中に入れていきたいという思い、視点みたいなものがあれば、含めて出していただいて、今後の作成に生かしていただくということになろうかと思いますので、よろしくお願いします。

〈委員〉

この全体の計画について文句は全然ないですし、こういう感じにしていくなだろうなと思いついて拝聴いたしました。

ただ、1つだけ気になるところがありまして、重点目標の6番、文化財の部分も関わってくるところですが「豊かな歴史文化等を学習する機会の充実」のところで、「山陰海岸ジオパークの地質遺産を活用し、小学生を対象にフィールド学習を実施します。」となっています。1月1日に能登半島の地震が起きましたね。今から30年ぐらい前は、丹後震災を受けて約70年だと。次は丹後だとずっと言われ続けた時代がありますよね。何で70年間なのか、当時の地学的な知見に基づいているのでしょうか、当時は少なくともそう言われました。次来るのは丹後だと。能登が来たから次は丹後に来るなんてことは簡単に言えることではなくて、地質学のほうは何年何月に起こるなんて分かりませんと、はっきりと言っていますので、今度はどこで大きな地震が起こるかはよく分からないにしても、少なくとも、全世界の中で5回のうち1回は日本列島で起こっているのは間違いない。ここ20年間でもそうだし、多分それよりさらに前の20年間でもそうだと思います。地震の少なくとも5回のうちの1回は日本列島で起こるし、日本列島で起こる以上は丹後半島で起こるというのは十分あるわけですね。

もう今97年になりました。今我々がいるところは旧峰山町になりますから、4人に1人が亡くなっているんですね。これは太平洋戦争の死亡率よりはるかに高いんですよ。太平洋戦争は15年ほどありましたので、それで死んだ方々をずっと最初から上げていっても1,000人ではとても足りない。それほどまでに大きな、つまり、日本の近代が経験した地震の中で基礎自治体を分母として25パーセントなんてあり得ない。確かに関東大震災は10万近い人間が亡くなったわけですから、規模としては丹後大震災よりも大きいわけですが、基礎自治体を分母としたときは25パーセントというのはとても少ない数なので、これ以上ひどい震災を近代日本は経験しなかったのです。つまり丹後が一番ひどいんです。現に4人に1人が死んでいるわけですよ。今我々がいるところで97年前の人口の4分の1はその時亡くなったんです。

こういうことですから、小学生を対象にしたフィールド学習と書いてありますが、もう少し扱いを強くしたほうが、私はいいような気がするんですよ。

70年とか100年にこだわるつもりはないですが、少なくともあと3年経ったら100年なんですよ。我々が今いるところは4人に1人が死んでいるわけなので、そうなったら次の備えを、こういうフィールド学習の中に「丹後学」という名前を使ってもいいですし、どこかで刷り込ませていく必要があるのではないかと思います。

極めてこの扱いが弱すぎると、私は思いました。以上です。

〈委員長〉

ありがとうございました。防災教育とも関連するような中身になってくるかと思います。ほかにございますか。

〈委員〉

まず、「京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会 最終まとめ」を見させていただきましたが、素晴らしい内容だと私は思いました。ぜひこれを具現化するものができる、めっちゃくちゃいいなあと感じました。散りばめられているワードも、とても革新的というか、すごく刺さるというか、そういったワードが使われていて、こんな教育になっていくといいなとまず思ったのが正直なところですよ。

その中で、これにもほとんど書いてありますが、子どもたちにとって対話する力はすごく重要だということ、もう1つはクリエイティビティ、創造力ですね。これも書かれています。もう1つ最近気になるのが、新しい価値を創造していく云々ってあるんですが、課題発見能力というものが、今の我々経営者にもすごく求められているというところがあって、ややこれが我々の中では課題意識でして、その課題を発見する力で、コアな課題、課題の本質をしっかりと掴んで、いわゆる課題を解決しようとする思考はだいぶ働き始めていますが、コアな課題を抽出する力が、セミナーとか行くと比較的日本人は弱いと言われています。

なので、課題解決というところにフォーカスを当てるべきで、発見するというのはとても大事なんだというところを改めて、これは私自身もすごく意識して勉強しないといけないと思いますが、そういったことを子どもたちの教育の中で、課題を発見して解決する一連のプロセスが子どもたち自身でできるような体験がこれから必要なのではないかと。その体験が学校の中だけやデスクの上だけで行われるのではなく、社会の中へ出て行って、フィールドで体験していくということがとても大事。その過程の中で、自分たちでは解決できない出来事が出てくるかも知れませんが、誰かに協力してもらうという形で、地域の主体者となつなげていくとか、そういうような一連の活動を教育の中でできると、課題が見つければ解決スキルを持っているので、目の前の壁を悲観的に捉えるのではなく、ピンチをチャンスに変えられるような人材が育つのではないかと考えたところです。

もう1点、ただこんな理想的なこと言ってますが、先日、うちの2歳の娘が保育園に「ぬいぐるみを持って行きたい」と言うと、5歳の息子が「持って行っちゃだめだ」と言うんです。そして説得する材料として「先生に怒られるよ」と言っただけですね。自分のところの保育園に入れているんですけど、あちゃーと思うんです。そのあと2歳の女の子に、「先生に怒られるから持っていくのをやめるの？」って聞くと、「ううん。汚れるからいやだ。」と言いました。2歳はまだ先生に怒られるからという価値感はないけど、5歳になると先生に怒られるから持て行かないという価値観になってしまっているところに、何かこう、自分のところの子ども園に入れておきながら、あちゃーって思った部分があって、

自由にしろというわけではありませんが、目的意識を持って、それに対して自分で選択する力というものを、それが「大人の言うことを聞いておけばよい」みたいなことになると、大人になるにつれ今度は大人のせいにする、上手くいかなかったのは「先生が」とか「親が」とか、誰かのせいにしてしまうというところも出てくるかなと思うので、どこまでいっても、子どもたち自ら選択し、生きていくという環境をしっかりと整えていってあげる必要があるなとも思いました。以上です。

〈委員長〉

ありがとうございます。今の課題発見的なその能力を、基礎的には学校教育でどうするかというようなことが、授業内容と関わってくるかなと思うのですが、本計画をつくっていく上で、今の課題と関連させて意識しなければならないようなことがありますでしょうか。

〈委員〉

私もまだまだ勉強不足だなと思っていますが、今のお話にとっても共感するところがありました。

というのが、やはり受け身な子どもたちの姿があるんです。それは子どもたちが悪いのではなく、過去の教育が悪いとも思えない。その時々により一生懸命教育に向かってきたということと思っています。

ただ、世の中の流れについて、やや視野が狭かったと自分で思ってみたり、新たな何かに挑戦するというよりも、今与えられたことを真面目に一生懸命やるということの値打ちを、どちらかというと評価をしてきたかなとも考えています。特に、京丹後という地域性の中で、真面目にこつこつ粘り強くというあたりは、良さだと思っています。地域に大人の方が多くいて、子どもたちはその大人の方たちに温かく見守られながら安心して育ってきていた。だからこそ、新たなものに挑戦をしなくとも、一生懸命今の環境の中で努力をすることで評価もされてきた。

ただ、ここ数年の中で、オンラインというものもありますし、世界からの日本への評価というものも随分変わってきましたので、そういうトータル的なものも含めて、教育、その10年というところをまさに今考えていくこと、方向性を誰もが同じ思いで10年後に向かっていくことが、本当に大切な時だと思っています。

なので、最初の話に戻りますと、学校教育の中で今変えていきたい、変えていかなければならないと思っているのが、まさにその課題を発見し、その課題に向かって一人ひとりがタブレットという1人1台の端末を活用して、いろいろなものをつながりながら、よりよい生き方とか、よりよい課題の解決に向かって、1人で、そして仲間と努力をしていくということを、発達段階に応じて取り組んでいくということがとても大切だと考えています。

小学校1年生に急にそんなことをやれと言っても、到底それは無理なわけですし、まずは友だちと学校で楽しく過ごすとか、自分が話したら聞いてくれる人がいるとか、そして

友だちと一緒に何かを頑張れたら、とても達成感があつたとか、そういう基本的な当たり前のことから、小学校では取り組んでいけたらと思っています。

当然、就学前のところでは、遊びの中で探究心というものを非常に育てていただいていますので、その探究する楽しさを1年生に引き継いで、そして課題発見につながるような教育を進めていきたいなと構想をしていますが、これは構想ではなくて妄想かも知れません。

<委員長>

ありがとうございました。もう少し何かございますか。

<委員>

先ほどおっしゃったように最近の若い職員は、昔の保育が、先生が言ったことをそのままきちんとしていればいい子だっていう評価をされてきた若者だなと思っていて、職員間でも話をしたんですが、自分の思いを伝えられない子どもたちが増えてきているということです。まずは自分の意思を伝えるというところを大切にしようと考えていて、0歳児でも意思がしっかりあるので、例えば食べたいものを自分で選ばせるとか、選択させるということを幼い頃からさせていかなければいけないなというところで頑張っていたり、小中学生みたいなことはできませんが、園児も「これは何だろう」とか「不思議だな、どうなっているんだろう」というところをまず見つけて、それを先生と一緒に、調べたりして分かったという、そういった力を今育てているところです。

<委員長>

ありがとうございました。それではオンラインで顧問のほうから意見がありますので、よろしくお願いいたします。

<顧問>

先ほどの2つのご発言と関連して、子ども主体の学びを目標として掲げておられて、これを具体的に達成するためには教員のほうもトレーニングをしっかり受けていかないといけないと思うんですね。私もそうだし、教壇に立たれている先生方もそうですが、いわゆる知識が教員にあって、その知識をシャワーのように降らせて、それを吸収させるという、一斉指導型の教育を従前行っているわけで、それら全てを否定するものではありませんが、機能する部分と、言われたことしかできないというような、あまり一斉指導型を膨らませてしまうと、自主性や主体性、問題発見能力が磨かれないというような課題があると思います。

子ども主体にしろさいと言われても、学校の先生はどうやれば子ども主体になるのか、事例なりを見ていない、体験していないので、かなり試行錯誤せざるを得ないところがあるのかなと思っています。

こういった目標を立てる段階で、京丹後に赴任してきた先生には、予算の都合もあるの

でスケールを小さくすると議論が小さくまとまるので、あえて言うと、世界の子ども主体をリードするような教育を視察する機会を得たり、世界が難しかったら日本国内にどんどん出張に行ってそういった授業を見聞きできる、そういった先生方とディスカッションできる場が京丹後の先生に提供されるといいんじゃないかなと思います。

1か0かの話ではなく、一斉授業が機能して重要な側面もあるし、子どもたちにボールを渡して子どもたち主体の授業をするということが発生してくるんですが、自由だからといって無茶苦茶していいわけではなくて、ルールの中で、あるいはルールをつくりながら、教育を受けながら自分たちの資質能力を磨いていくという中で、どうしてもITは、教科書のように検定を受けていない内容もたくさんインターネット上に存在することを思うと、ましてや最近の生成AIなんかはいわゆるハルシネーションと呼ばれる言葉を合成するわけですから、語り口調は非常にそれらしいが正しくない情報が混ざっているということが往々にしてあるわけです。

これを鑑みると、子どもたちに情報リテラシー教育というのをしっかりやっていくんだということを、計画の中に強く盛り込んでいく必要があるのかなと思っています。これが、子ども主体の教育と、それを支えるリテラシー教育、教師の指導という3点につながっていくと思うのですが、少し視点を変えまして、京丹後は端から端まで移動すると非常に距離のある土地だと思っていまして、京都からも距離が若干あるということを考えると、遠隔教育の機能というか、学校教育環境としてしっかり持つと。今我々はZoomでやっていますが、コロナの休業期間中にもこういったZoomなどのオンライン会議を使ったと思いますが、これって本来大人が会議するためのものであって、子ども教育するためのプラットフォームではないんですよ。コロナのときは仕方がなかったのですが、遠隔教育を行う際には、本当に最適なプラットフォームっていうのはどういうものなんだろうかと。それを京丹後の教育環境としてどのように整備するんだろうかということを、しっかり研究して実装していく必要があると思っています。

これは、学びの意欲を喚起するようなこういった集合教育の場もあれば、例えば、ビデオで撮り溜めてあるようなオンラインの教材があって、これは京丹後市1市でできることではないかも知れませんが、そういったライブラリーが京都にはあって、京都に来た子どもは、ちょっと勉強が遅れても学び直しで、家に帰って自分でビデオを見ればキャッチアップできるような環境も必要だろうと思います。

基礎学力というのは非常に重要なので、ICTをフル活用しながら担保していくということ。あと、今日、文化財とか遺跡の話もたくさんされたので、ふと思い出して見ていたのですが、京丹後市ではきっとかなり有名な方だろうと思うんですが、久美浜町の久美浜湾の海中遺跡を発掘した京丹後市の高校生が朝日新聞に載っていて、彼女は探究学習をされて、クラウドファンディングまでして大学と連携して調査研究をされている。すごい人材がこの京丹後にはいるんだなということを改めて思っていたのですが、こういった自分がやりたいことを、周りの力を引き寄せながら、外に発信していく、こういった教育がもっと推奨されるべきだなと思っていて、1つ分かりやすい私なんかもよくお勧めするケースは、あまた世の中にはコンテストとか、子どもが参加できるような大会みたいなもの

がありますが、そういったものに積極的に応募できるような支援環境、場合によっては旅費を出してあげるよとか、研究費を出してあげるよと。大学は国に科研費を応募して研究費を取りますが、そういったことが推奨されるような、今は重点項目を決める話をされているのに、私は具体的なアクション、瑣末な話をしていますが、そういったことも考えられるかなと思いながら話を聞いていました。

〈委員長〉

ありがとうございます。大事な今後の視点を提示してもらったかと思います。
続いてオンラインで顧問のご発言ということですので、よろしくお願いします。

〈顧問〉

今出されていた議論、私も皆さんのコメントに深く共感していました。

先ほどおっしゃったところで、教師自身が、主体的・多様的で深い学びを実は経験してきていない中で、それを教壇で実現していくのは結構難しいだろうというようなご趣旨の発言もあったと理解をしています。

子どもの学びと教師の学びは相似形であるとよいのではないかという考え方もここ数年だんだん広がってきているところですが、そういった観点からも非常に重要なポイントだなと思いました。今学校に伴走させていただく形で働き改革の取組も一緒に進めさせていただいていますが、上手くいくコツみたいなのところと言うと、実は先生たちのアンラーンと言いますか、これまでの成功体験を上手に生かしたり捨てたりしながら、自分が持っているバイアスに自覚的になって、当たり前を問い直す力みたいなものがすごく大事になっているなというの、現場を見ていても感じるところです。

もう1つ、今まで皆さんがご議論されてきた中で、大事なのは非認知能力もなのではないかというご提言だったかなと思っています。今回の教育振興計画の策定や、先ほどご紹介がありました在り方検討会のとりまとめといったところを踏まえますと、社会に出たあとに力強く生き抜いて活躍していける子どもたちを今バックキャストで育むんだという理解をしました。そのために探究の授業にも力を入れておられると理解しています。

そうすると、国語や算数といった教科学力を伸ばしていくということは当然重要なことだとは思いますが、いわゆるレジリエンスだったり自己有用感だったりとか、非認知能力と言われるところをしっかりと伸ばしていくこと、それを京丹後市の学びの中でしっかり伸ばしていくことができているのかを確認するという営みもすごく大事になってくるのかなと思いました。

今回の振興計画のKPIにそういった非認知能力が育まれているかということを直接的に置きに行くのは、もしかすると少し難しさもあることかも知れませんが、そもそも社会を生き抜く力というのはどういう力なのかということを、もう少し解像度を上げて言語化していくなど、そういったことも中長期的には大事にしていくべきポイントなのではないかなと、今皆さんのご議論を聞きながら思いました。

<委員長>

非認知能力をどう伸ばすかというような視点も、改めてご指摘をいただきましたので、これも今後の大きな課題になってくるんじゃないかなと思います。

それでは、学校教育の中身的なことに偏ってきましたので、話題を変えたいと思います。社会教育の関係で、今の話とも関連づけながら、学校教育と社会教育をどうつないでいくかというようなところで、会社のほうでどういうふうに仕事ができる力を伸ばしていくかみたいなご視点もありましたが、何かございますか。

<委員>

今お話をいただいているのは多分、1,000人いらっしゃったら1,000の答えがある。それを今、1つにしようという会議をされていらっしゃる。非常に難しい取組だと思いますし、非常に物量も多くて難しいことが分からないというのが正直なところなんです。今、お振りいただいた内容でいきますと、事業者さんのほうに行って、採用でこんな人材がほしいというご相談をいただいたときに、どの人ですかということ、その人を見て分析していくと、見えてくることがあります。それは、ご自身が働くことによって、お給料以外の報酬をもらっている方。つまり、その方がお仕事をすることによって、お客さんから感謝してもらって「ありがとう。助かったよ。」と。これは給料以外の報酬なんですよね。そして「その人のために頑張ったわ」って達成感を感じて、できる社会人の人は、会社から「こんな勉強しなさい」とか「これだけ成績伸ばしなさい」って言わずとも、自分がそういった給料以外の報酬を得るためにどんどん自己研鑽をしていって、どんどん成長していかれて、使える人材になっていて、会社の大事な人材になっているという傾向があります。

だから、教育の現場で、社会に出てからそういった会社がほしいと思う人材をつくれるということであれば、そういったことを感じ取れる心、それは家庭なのか学校なのかどこがつくっていくのがよいか分かりませんが、クラブ活動での先輩とのやりとりだったり、当然先生から自分が頑張ったことを褒めてもらえたり、いろいろな経験の中からだとは思いますが、そういったことが感じ取れて頑張れる子どもをつくっていくという心の教育が非常に大事なのかなと。

難しいことは全く分かりませんが、そういったことを少し感じています。

<委員長>

広げていただいて、またよかったかなと思います。ありがとうございます。

関連して何かございましたらお願いしたいのですが、どうでしょうか。

<委員>

全体を通してですが、1つ資料がとても見にくいなと思いました。閉じ方が間違っているのかなと思って、資料がとても見にくかったなということが1つあります。

この会議では、現在の進捗状況を今日ご説明いただきましたけども、大きなお仕事は次

の計画なのかなと思っています。そんな中で、最初に教育長や委員からもあったように、これをベースにしながら検討しましょうということでした。なので、これの説明をもう少ししていただいてもよかったのかなと思います。

同じく教育長が、総花的に国や府の計画がこうだからってというようなことでなぞらえてやっていく必要はないんだよってということと、こんな素敵なものがあるなっていうことで、きっと多分次の計画は素晴らしいものができてるに違いないと思っています。

少し先読みしてみると、次に集まるときには、素案を提示していただくというスケジュールになっていますので、今日のうちに言うておかなければと思っています。

全然違うものをつくってもうよいのかなと思っているのは、目標の指標はあまりたくさんつくっても、数を稼ぐことに一生懸命なってしまって、最初に言われたバックキャスティングで10年後を思い描きながら今何が必要かみたいなの、その大きな目標を見失ってしまわないかなと思いますので、この数字の目標ってどこまで必要なのかなというところも思っています。

そのようなところも含めて、とても大切な計画ですので、そういうものができればいいなと思っています。

<委員長>

今後の進め方の視点的な大事なところもご指摘をいただきましたので、参考にさせていただきたいと思います。

人間生活を営んでいく上で、健康ということが、特に基本に大事なことであります。スポーツ振興の関係で何かございましたら、話題をつくっていただけますか。こういう点で、ぜひ入れてほしいというような課題意識がありましたらお願いします。

<委員>

僕はちょっと変わりもんだと言われていまして、子どもたちに、プロ意識ではなく、スポーツをすることによって人間関係をつくってほしい。これを僕は基本に思っているのです。目指すものが高いことはよいのですが、夢が壊れる部分もあります。子どもには、スポーツについては楽しむ。アイルランドから英語教育で来られた人がいまして、スキーに一度行ったのです。そしたら、僕もそうですが、日本人の場合一度スキーをただけでは、できるとは言わないが、彼女は「スキーができる」と言う。「上達しましたか」と聞いたら「ノー」間違ってますと言われ、何が間違っているかと聞くと、「楽しめたか」ということを聞いてくださいと言われた。

これはもう今の子どもたちに言えることだと思います。子どもたちの内心というか、心に迫る教育をしていかなかったら、今後、不登校も含めて、絶対なくならないと思っています。

スポーツに関してもやはり指導者はものすごく大事です。子どもたち一人ひとり特性を持っています。その部分も含めて、指導者、これは学校の教育も同じだと思いますが、そのところも含めて、この基本計画は理想的なところも大事ですけど、根底の部分も分か

って、この振興計画が進められたなあと思っています。以上です。

<委員長>

ありがとうございました。

そろそろ終わりの時間が近づいていますが、次の方、よろしくお願いいたします。

<委員>

スポーツにということですが、少し視点が変わっているかも知れませんが、私は、将来に対して非常に不安です。特に京丹後市は、人口が10数年後には6割か7割ぐらいに減るという人口統計が出ています。

この教育振興計画に、果たしてそういう視点があるのかどうか。今のを見てみますと、今の人口がそのまま平行していくような対応だと思っていますので、その危機感が教育委員会の職員なり、我々にあるのかどうか。その視点を忘れたら絶対に駄目だと思っています。特に学校現場においては、子どもの数が減ってくるということは目に見えて分かっているのだから、それをどういうふうに学校の先生方は対応していくのかという視点が、もっとこの中には入っていく必要があるだろうと私は思っています。

そういう観点からいきますと、全ての面において社学連携、社会人と学校現場が協力してやっていかないと、これからは学校だけで全てが完結するという時代ではなくなっているので、そこをどういう格好でここの中に入れていくのかという視点は全然ないと思っています。

それとあわせて、スポーツ協会は、障害者スポーツの振興ということを定款の中に謳いました。でも、ここの中には障害者、肉体的にもそうですし、これからどんどん増えていくであろう心の病、その方たちをどうしていくのか。特に小学校、中学校、高校、社会人になっても若いうちに、それで潰れていってしまう人が随分とあるというのは、実際に目に見えていますし知っていてもいますが、その視点が全然この中に謳っていない。これは非常に片手落ちだろうと思いますので、その辺もあわせてしっかりしたものをつくっていただきたいと思います。

<委員長>

ありがとうございます。社学連携と人口減の視点に沿った計画づくりが必要だという、またワードを増やしていただいたのではないかと思いますので、大事な視点として、今後の作成に生かしていけるのではないかと思います。

続いて、文化関係でよろしくお願いします。

<委員>

とても重たいなと思いながら聞かせていただきました。

今子どもたちのことについてはすごくたくさん出ているのですが、私たち大人という部分で考えてみたら、京丹後市が目指す教育の視点2に「生涯にわたり主体的に学ぶことの

できる環境づくりを推進します」とあって、子どもだけではなく、高齢者も含めて大人という部分にも、生涯にわたって意欲的に。私は文化協会に入っていて、舞台とか発表するのですが、人に見ていただいたら「やっていてよかったなあ」という気持ちになって、注目されるということはすごく快感があるんですよね。子どもたちもそうだと思います。

先ほどのアンケートを見ますと、公民館が主催する講座やイベント等たくさんあるんですが、それに参加しなかったとか、図書館でも、利用しなかったという回答がすごく多くて、これはなぜかなと思います。ポスターも立派なものをつくったり、放送をしたりと、発信は結構されているのに参加が少ない。それはなぜなのか、未だに分からないです。口コミで「来てよ」とか「私出るし」とか言いながら集客を試みっていますが、何か意欲、関心が少ないというか、それはなぜなのか、どうしたらいいのかっていうことが、分からない。毎年いろいろなイベントがあるのですが、このイベントに行きたいけどもこっちにもイベントがあって、同じ日に重なってしまっって行けないとか、分散しちゃいますよね。その辺を何とかできないか。

イベントをするとたくさん来てほしいじゃないですか、その辺の視点というか、どうしたらよいのかという部分を、もう少し掘り下げて、みんなが「行ってよかったな」とか「楽しいな」という幸せ感が掴めるようにしていったらよいなと思います。

〈委員長〉

また新たな視点を出していただいたと思います。

それではそろそろ、次に進んでいきたいと思いますが、何かございますか。

では先を急ぐようですけども、「9. 京丹後市教育振興計画策定スケジュールについて」ご説明をお願いいたします。

9. 京丹後市教育振興計画策定スケジュールについて 資料5

～事務局説明～

〈委員長〉

当面のスケジュールについてご説明がありました。

ご質問ありますか。ご希望も含めましてありましたら。

～全委員 なし～

それではないようですので、次第の「10. その他」で何かございますか。

10. その他

～事務局 特になし～

〈委員長〉

それでは、定刻でちょうど終わりそうな時間が来ましたので、以上で本日の会議を終了させていただきます。

不慣れな進行で、大変ご協力をいただきまして、ありがとうございました。また今後ともよろしくお願いいたします。

それでは最後に、閉会の挨拶を教育次長のほうからよろしくお願いいたします。

11. 閉会あいさつ

＜教育次長＞

本日は、皆さん大変お忙しい中、会議にご出席いただきましてありがとうございました。

第1回目ということで本当にたくさんの資料を、こちらから一方的に説明させていただいて、資料も見にくかったり、説明が分かりにくい点もあったかと思います。十分な時間もなかったと思いますが、そんな中、皆さんそれぞれのお立場から、いろいろな視点でのご意見やご指摘、ご提案等いただけたと思います。

今回、教育関係の方だけでなく、産業の関係の方だとか、地域の代表の方だとか、また、市外の方にも入っていただいて、以前よりも大変多彩な皆様に参加をいただけて、今日第1回の会議ができました。今日のご意見をお聞きしまして、この会議がすごく充実した会議になるなということを感じたところで、いただいた意見をどのように事務局としてまとめて、素案を次回提案するということになっていますが、どこまでのものができるか分かりませんが皆さんからいただいた意見をしっかりまとめまして、皆さんに見ていただき、またそれを叩いていただいて、少しずつ計画づくりが進められればありがたいかなと思います。

また2回目以降も引き続き、もう少し時間を取りまして、いろいろなご意見をいただきながら進めたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

＜教育総務課長＞

長時間にわたりご協議いただき、ありがとうございました。

次回、令和6年5月を予定しており、また日程調整をさせていただきます。

お帰りの際には、お車などお気をつけてお帰りいただきますよう、よろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。